

Title	河上肇の初期経済思想：『日本尊農論』を中心として
Sub Title	Economic thought of Hajime Kawakami in his younger days : an essay on the appreciation of Japanese agriculture
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1987
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.80, No.3 (1987. 8) ,p.197(1)- 212(16)
JaLC DOI	10.14991/001.19870801-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

河上 肇の初期経済思想

——『日本尊農論』を中心として——

飯 田 鼎

- (1) 日本経済学史における河上肇
- (2) 河上肇の思想形成
- (3) 『日本尊農論』の現代的意義

(1)

河上肇の名は、第2次大戦前および戦中に経済学を学んだ者にとって忘れ難いものであろう。とくにマルクス主義経済学研究を志した若者で、河上肇の著作を読まなかった者はいないのではなかろうか。しかし今日、大学の講壇においてあるいは演習（セミナー）の席上で、この人物に触れることがあっても、学生は一向に無関心で、その名前を聞いたこともないというし、従って一体彼が何者で、日本の経済学史上どのような地位を占めるかということについても、まったく無知と言っても過言ではない。

しかしこれについては、いわゆる「活字離れ」あるいは映像文化の浸透によって、学生が社会科学書を読まなくなったからということが理由としてあげられるかもしれない。だが他面ではこの事実は、大学教育に携わる研究者たちが、わが国社会科学の歴史に巨大な足跡を印した人々——必ずしも河上肇に限らず一般に——について教壇で語らなくなってしまったということの意味するのではなかろうか。

いうまでもなく、わが国には徳川時代以来、商品経済の発展を背景に、多くのすぐれた経済思想家が輩出したが、しかし社会科学としての経済学研究は、幕末・明治期の西ヨーロッパを中心とするいわゆる西欧経済学の導入を契機として、ヨーロッパの経済学説やその理論の紹介を基軸として発展を遂げた。たしかにわが国においては、18世紀以来、各地に芽生えつつあった経済思想が、日本の土壌に生い立った在来の学派的存在として、外来のヨーロッパ経済学との間に熾烈な格闘を演じ、そうした錬磨の過程で独自の経済学、たとえばイギリス古典学派の影響をうけたジャン・バチスト・セイやシスモンディ、あるいはF・リストに始まるドイツ歴史学派に代表されるような、その国固有の経済思想の上に立つ経済学を建設するまでには至らなかったことは事実である。

しかしそれにもかかわらず、田口卯吉や福沢諭吉にみるように、経済的自由主義を明治20年代の日本資本主義の現実のなかで検討し、その後進国における意義と限界を明らかにしようとする努力や、ドイツ歴史学派、とりわけフリードリヒ・リストの影響の下に保護貿易の緊急性を訴えた大島貞益、あるいはまた明治14年、松方緊縮財政政策の余波をうけて、萎微沈滞した地方産業の振興策を模索しつつ全国行脚を敢行した前田正名、グスターフ・シュモラーやアドルフ・ウグナーの下で社会政策を研究、日本社会政策学会を創設した金井延、金井と同時代人で、ルポルタージュ風ではあるが、日本の社会政策研究史上、不滅の業績『日本の下層社会』を書き綴った横山源之助、ほぼ立場を同じくし、労働者の解放に力を尽し、独自の労働運動論を生み出した高野房太郎および佐久間貞一、これらの人々のなかには、その理論の構築にあたって、ヨーロッパの経済学の痕跡が必ずしも明確ではない者も少なくない。しかしそれだけに却って、前田や横山あるいは高野等の思想には、当時の日本人にしては珍しい独創性と閃めきがみられるともいえよう。

また幸徳秋水や片山潜も、実践家として日本の社会主義運動史上画期的な役割を果たしたが、とくに幸徳は、J・A・ホブソンの著作に先立って、『廿世紀の怪物 帝国主義』を現わし、ヨーロッパ帝国主義が、やがてわが日本の頭上をも襲うであろうことを示唆した。

日本の経済学はこのように、一面においてヨーロッパからの「外来文明」としての西欧経済学を受容しながらも、これを武器として絶えず既成の理論や伝統、あるいは因襲に囚われた思想を批判する姿勢を忘れなかったのである。その意味でわれわれは、明治30年代から昭和初頭に至るまで、経済学研究を西ヨーロッパの豊かな土壌に求めながら、その研鑽に全霊を傾け、精進を怠らず、日本の経済および政治批判を、はじめは大学の研究者として、そして後には共産主義運動家として歩み続けた河上肇の名は永遠に記憶されるに値しよう。

河上はいかなる時代に生き、どのような活動をしたか、これについては既に住谷悦治、杉原四郎、住谷一彦の諸氏の研究があり、ここでの筆者の任ではないが、初期の代表作ともいべき『日本尊農論』について論ずるにあたり、彼の人間および思想について簡単な考察を試みておく必要がある。

河上は、明治12(1879)年、山口県岩国町に生まれ、昭和21(1946)年、京都において67年の生涯を閉じている。彼の生まれた時代を主要な社会経済的事件との関連においてみれば、日本資本主義が、西南戦争後の不換紙幣の濫発に伴う経済的困難によって、国民生活を脅かし、やがて松方正義による国家財政緊縮政策がとられる前夜の時期にあっている。同時に明治14年の政変がおり、日本の政体は次第に大きな転換を迫られていた。その背景としては、肥前出身で政界の大立物大隈重信と、西郷、大久保および木戸等、維新の元勳が去った後、にわかにかぎをなすに至った伊藤博文、井上馨との間に矛盾が激しくなり、この関係が、明治初年以来、約1,400万円にもものぼる膨大な国費をついやして行ってきた北海道における官営事業の全部を、時価39万円という破格の価格で、しかも30ヶ年の年賦で五代友厚の経営する関西貿易商會に払い下げようとしたいわゆる北海道開拓使官有物払い下げ事件を契機として、自由民権家の政府非難が激化し、政府批判の立場にあった大

隈の行動が民権運動に通ずるものとして、その責任が追及されるという事件がおこった。この政変によって大隈は失脚し、大隈の背後には福沢の力が働いているとみた政府は、福沢の門下生、矢野文雄、尾崎行雄、犬養毅、中上川彦次郎等にたいし、一斉に官職を辞することを強要するに至った。この事件は、日本の政治国家体制が、福沢によって唱えられてきた英米流の議会制民主主義への志向から、ドイツの国権主義への方向を目指す転機となったものとして象徴的である。河上はこうした明治維新以後、おし進められてきたヨーロッパ化=近代化政策が、ひとつの転換点を迎える直前に生まれ、日清戦争に勝利をしめた1895(明治28)年、山口高等学校文科に入学、日露戦争勝利の1905(明治38)年から本格的な執筆活動を開始した。その3年前東京帝国大学法科大学を卒業後に、農科大学実科講師、学習院教授を嘱託され、また専修学校(現専修大学の前身)、台湾協会専門学校の講師を依頼されていた。

河上肇の学問的活動は、この頃から始まるが、それは同時に、彼が明治38年10月1日から12月10日まで、36回に亘って、千山万水樓主人という筆名で、『読売新聞』に『社会主義評論』を連載して読者を魅了し、その名文をもって人々を驚ろかした時期でもある。さらに河上は、この同じ年、『社会主義評論』執筆終了直後、一切の教職を辞して伊藤証信の無我苑の運動に参加したが、間もなくその主義が彼の信ずるところのものと違背することを悟り、脱会するというように、その行動には、やや性急で誤解され易い面があったとはいえ、その盛んな執筆活動は、世の識者の注目するところとなった。主要な著作としてこの1月、『経済学上之根本問題』、6月には、セリーグマン著書の邦訳『歴史之経済的説明・新史観』(Edwin R. A. Seligman, *The Economic Interpretation of History*, New York, 1902)、9月には『経済学原理』を発表、11月には、ここで問題とする『日本尊農論』を刊行している。

河上の著作に接して何よりも強く印象づけられることは、その文章にはつねに警世家的思想を秘そまさせていること、さらに同時代に活躍していた人々の活動にたいする強い関心と広汎な視野であろう。執筆活動を開始した明治31年から、彼が社会主義認識においてひとつの転機を迎えた明治38年までの著作をみるに、国法学教授の⁽¹⁾一木喜徳郎の天皇機関説をはじめ、⁽²⁾片山潜、⁽³⁾矢野龍溪(文雄)、頼山陽、阿部秀助、佐藤信淵、太宰純、安部磯雄、田島錦治、金井延等、当時の学者、評論家の所説について論評し、とりわけ社会主義に強い関心を抱き、後に日本マルクス主義研究の泰斗と仰がれる存在となるべき萌芽を示している。現代的な問題分析のために徳川時代の思想家にさかのぼり、同時代人の経済思想を批判的に摂取し、さらにヨーロッパの経済学者の説を随所に引用する彼の論調は、当時、日本社会政策学会が創立されて次第に活発に活動しはじめつつあったときであ

注(1)「憲法上天皇の地位を論ず」、明治35年8月15日『明義』3巻8号、『河上肇全集』第1巻、岩波書店、1983年、59~61頁。

(2)「片山潜先生に呈す」、明治35年9月13日、『労働世界』6巻15号、全集第1巻72~73頁。この小論で、河上は、すでにその指導しつつあった鉄工組合が衰亡期に入り、苦悶しつつあった片山に共感しつつも、「足下の唱導せらるる所のかの社会主義に至りては生、今講学の門に入るもの漸く研究の途に上れるのみ、その可否利害もとより生の未だ解せざる所なり」と断っているのが面白い。

(3)「矢野龍溪著新社会を読む」、『明義』3巻9号、明治35年9月15日。全集第1巻74~81頁。

るだけに、社会改良主義の根強い影響下にあったことが考えられるが、同時に、日清戦争後の産業革命の進展によって、日本の産業構造に重大な変化があらわれ、重商主義的政策の追求は、工業立国のスローガンとともに日露戦争の勝利以後、加速されるに至った状況をも反映している。

『日本尊農論』までの彼の経済学研究は、マルクス主義者への成熟に向っての長い道程にとって、いわば序章の部分にあたる。しかしその前に若き日の彼の思想形成の考察からはじめよう。

(2)

河上は、太平洋戦争の様相が次第にきびしくなっていった昭和18(1943)年頃から書きはじめ、第2次大戦終了後の昭和22(1947)年にはじめて公刊された『自叙伝』(但しここでは、1980年、岩波文庫版を使用)のなかで、青年時代の思い出を、つぎのように興味深く書き綴っている。

「私は十四歳未満の時に、山口高等中学校予科に進学したので、初めて父母の膝下を離れ、まだ汽車の連絡もなかった当時、郷里の岩国から県庁所在地の山口に遊学した。後に制度変更のため山口中学校の生徒に編入され、最後には山口高等学校の生徒になり、前後五か年間をそこで過した。

ところが当時の山口には、あゝした辺鄙な小都会のことであるから、私の注意を惹くような社会教育的な刺戟は、——政談演説にしても、宗教上の説教にしても、何一つ無かった。……

明治三十一年九月、十九歳未満の時、私は東京帝国大学法科大学に進み、初めて日本国の首都東京に遊学した。序に書いておくが、私は高等学校を卒業する間際に、文科から法科に籍を移したのであった。これは同年六月に起った中央政界の波瀾——それは月末に至り日本最初の政党内閣を生むに至ったもの——に刺戟されたためであったが、今調べて見ると、この新内閣の成立は六月三十日になっているから、私が転科の決心をなしたのは、どうしても卒業試験の直前だったに相違ない……」⁽⁴⁾

「頻りに文学を楽しんで、文学者になりたいつもり」の青年が、法科に籍を移すほど明治31年当時の日本の政治は沸騰していたが、この多感な青年河上をひきつけたものに政治演説会というものがあった。

「さて東京へ出て見ると、これまで五年間もいた山口のような片田舎の小都会と違って、演説会というものがあるに盛んに行われていた。(当時は演説会がすでに衰えていた頃だったのだが、私には盛んなものに思はれた。)漸く東京の空気になじむようになった私は、この演説会に少からぬ興味を覚え出した。……明治三十年代には、日々の新聞紙に『今日の演説』というような欄があった。私はそれによって会場と時間を確めながら、よくそうした演説会に出掛けたものだ。木下尚江、内村鑑三、島田三郎、田口卯吉、田中正造、安部磯雄、西川光次郎、石川安次郎、河上清、幸徳伝次郎、当時私が演壇の上にその風姿を見ることを得た人々の中には、こうした名前

注(4) 河上肇『自叙伝』(五)、岩波文庫、1980年、117頁。

が今尚お私の記憶に残っている。当時片山潜氏は主として労働者を相手にして居られた為めである、インテリゲンチヤの範疇に属する私は、一度も街頭の演説会で氏を見ることは出来な⁽⁵⁾かった」。

若い河上にもっとも強い印象を与えたのは木下尚江と内村鑑三で、「それは私の思想の上に、大学教授の講義よりも遙^{はるか}強い影響を及ぼした」ほどで、デモクラシー、社会主義、キリスト教、そうしたものについての河上の関心は、まったくこの演説会から生まれたものであった。彼は、内村には寄りつきにくいように感じられて馴染まなかったが、木下尚江を何度か訪問している。

河上は、つぎのように書いている。

「その頃私が初めて木下尚江氏の風姿に接することが出来たのは、神田の青年会館に於てであった。多分それは『毎日新聞』主催の演説会であったのであろう……。

私は氏の口から、今まで嘗て聞いたこともないような熱烈な調子の演説を聞いた。私が今でも尚おはっきりと記憶して居るのは、その天皇神権論に対する攻撃の露骨さであった。山口の片田舎で育った私は、——山口には謂わゆる藩閥の根源地であり、そんな話は私語にすら聞いたことは無かったので——こんな演説を聞かされて驚いた。と云うよりも、沢山に集まっている聴衆が之に共鳴して盛んな拍手を送るのに、ひどく驚いた。山口などであったらば、弁士は袋叩きにされただろうと思はれたからである。

おかげで私の眼界は開けた。恐らくこの時から私の心にデモクラシーの思想が芽生えそめたのであろう⁽⁶⁾」。

その後明治34年末、本郷の中央会堂で開かれた婦人鉷毒救済会の演説会において、足尾鉷毒事件の被災者救援のために熱弁を奮う田中正造、木下尚江および島田三郎等の風貌に接し、感激した河上は、「演説会が済んで会場を出る時、着ていた二重外套と羽織と襟巻を係りの婦人に差し出し、翌日は朝起きると、身につけている以外の衣類を殆んど残らず一纏めにして行李に納め、人力車夫に頼んで救済会の事務所に送り届けた⁽⁷⁾」。

一見、風変わり、奇矯ともみえる彼の行動は、その生涯を貫くモチーフともいうべきヒューマニズムのあらわれでもあった。そしてそれは何よりもキリスト教からきたものであることを率直に物語っている。内村鑑三を訊ねたことは一度もなかったが、「しかし私は継続的に『聖書の研究』を購読していたし、バイブルを手にするようになったのは、全く内村先生の感化によるのである。幼い時から宗教というものに何の縁もなかった私は、かくて初めて基督教を通じてその門に近づくに至ったのである⁽⁸⁾」。

若い頃、キリスト教に関心を持ち、バイブルから深い影響をうけた者は少なくない。福沢諭吉も

注(5) 前掲書、118～119頁。

(6) 前掲書、164頁。

(7) 前掲書、165頁。

(8) 前掲書、119頁。

そのひとりであったが⁽⁹⁾、儒教的道徳観と漢学的素養の雰囲気の下でその幼少年時代をおくった青年河上にとって、バイブルとはどのようなものであったか。

「私はバイブルを読んで非常に強い刺戟を受けた。それは論語や孟子などを読んで得たのとは全く品質の違ったもので、これまで如何なる書物からも私の嘗て得なかつたところのものである。

初めて読んだ時に、ひどく私の心を突き動かし、それ以来、ずっと後々までも、強い力を以て私の魂に迫ったものは、なかんづく次の一節である。

『人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。なんじをうったてて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。』(マタイ伝、五、三九—四二)⁽¹⁰⁾。

あまりにも有名なこの一節を、読む人は誰も深い感動をもって迎え、神の啓示をきく想いに駆られるであろう。しかしそれは実に、人間の姿をした神の行いとして仰ぎみるのであって、それを実際の生活において実践しようとする者は少ない。しかし河上は、あたかも雷に打たれたような強い衝撃をこの訓えによって受け、実生活のなかで行動しようとしたのであって、足尾鉍毒地の被災民救済のための彼の行為は、そうしたバイブルの説く「絶対的非利己主義」こそ、人生を生きる上での指針のように感じられた結果であった。

「私には之が絶対的非利己主義の至上命令と感じられた。私の良心はそれに向って無条件的に頭を下げた。今考えて見ると不思議のようだが、何故というような理由の反省は少しもなしに、私はただ心の中で『そうだそうだ』と叫んだ。そうした絶対的非利己的態度こそが、洵に人間の行動の理想でなければならぬと思はれた。そして自分の心の奥には、文字通りその理想に従って自分の行動を律してゆくようにという、強い要求のあることが感じられた。

だが、それと同時に、私の心の中ではまた、『そんな態度では、お前はとて此の世に生きて行くことが出来まい。お前はすぐにも身を亡すであろう』という危惧の念が動いた。

かくして私の心には、初めて人生に対する疑惑が——私は自分の生活をどう律して行けばよいのかという疑惑が——植えつけられた。私の心の煩悶はそこから始まる。それは私のこの歴史の始まりだと云つてもよい⁽¹¹⁾。

木下尚江は、もちろんこの特志の大学生河上肇を記憶していて、足尾鉍毒事件に身を挺して奮闘し、生涯を捧げた田中正造翁の、「明治天皇への『直訴』という背後には、こうした光明があったのです」という河上にたいする高い評価に彼は感激している⁽¹²⁾。

やがて河上は、大学卒業後、いくつかの学校で講義を担当しながら、1905(明治38)年頃から本格

注(9) 福沢諭吉が、明治4年、長男一太郎、次男捨次郎のために書き与えた「ひまのをしへ」は、まさにバイブルの精神を伝えたものである(『福沢諭吉全集』第20巻、67～77頁)。

(10) 河上、『自叙伝』(五)、119～120頁。

(11) 前掲、120頁。

(12) 前掲、172～173頁。

的執筆活動を開始する一方、10月1日から12月10日にいたるまで、36回に亘って千山万水樓主人というペン・ネームで、『読売新聞』に『社会主義評論』を連載したが、間もなく絶対的非利己主義の立場に抗しきれず、一切の教職を辞して伊藤証信の無我苑に入り、絶対的最高の真理として「無我愛」を把握しようとして苦闘するが、やがてその運動の偽瞞的性格に失望し、わずか2か月にして、翌明治39年2月25日、無我苑を去っている。

そして5月には読売新聞記者となり、再び旺盛な執筆活動に還り、さらに、明治41年(1908)年には、京都帝国大学から講師として迎えられている。その若き日の代表的著作『日本尊農論』は、彼の思想が、日露戦争を境として奔流する時代の渦巻きの中なかで左右に動揺するなかで書かれたものであり、冷静な抑制された筆致でありながら、ナショナリストとしてのはげしさを感じさせる面をもっている。しかしながら、彼が田中正造や木下尚江および内村鑑三を識ったことは、河上がこれについては、ほとんど、いや全くふれていないとはいえ、彼の深層心理に、名士の演説会や足尾鉍毒事件と同じ程度に、あるいはそれ以上に深刻な衝撃を印した運動をも意識させたのではなからうか。平民社を中心とする反戦平和運動がそれである。

自叙伝を読んでみて気がつくことは、その叙述の非常に多くの部分が、昭和5(1930)年、新労農党結成以後、書齋から街頭での実践活動への飛躍にはじまり、間もなく一共産黨員としての苦難にみちた生活体験、やがて逮捕投獄され、獄中でのさまざまな体験や思い出などで占められており、明治期、日露戦争を中心とする国民一般の思想的動揺についてはほとんどふれられていない。河上個人の思想的展開については、すでにのべたように、かなり克明にふれられており、そのなかで田中正造、幸徳伝次郎、木下尚江、内村鑑三が登場し、またその他の著作のなかでは、安部磯雄、片山潜などの社会主義者が現われる。

しかし注目すべきことは、河上は、これら社会主義者のほとんどすべてが熱烈に関心をよせ、あるいは積極的に参加した平民社の反戦平和運動にまったくふれていないことである。これは彼の青年時代、その思想形成にとって何事かを暗示するものではないか。これら明治の先駆的社会主義者の演説を聴き、その雄弁に圧倒され、あるいは感嘆し、あるいは共感しながらも、直接行動的な反戦運動や天皇制批判には消極的あるいは懐疑的であったことは明らかで、「天皇神権論攻撃にたいする大衆の拍手喝采」におどろいていることから想像できる。この時代、若い河上の思想像は一体何であったろうか。自叙伝を注意深く読み通したほどの者ならば、つぎの一節に殊更に感銘したにちがいない。

『梅陰生』という判を作っていたことはさきにも述べたが、私はこの号を吉田松陰先生に私淑して附けた。私のうちの庭には梅の老木があって、毎年元日頃には満開になったほどで、それは珍らしい早咲の白梅であった。松の代りの梅は、それから思いついたものである。徳富蘇峰の『吉田松陰』は、私が高等中学校の予科に入った年に刊行された。私はそれを非常な感激を以て読んだことを記憶している。……

萩の松陰神社は、山口から手頃の遠足距離にあった。私は何回かそこへ出掛け、松陰先生の

筆跡の石刷を何枚も買って来て、それをデカデカと寄宿舍の勉強室（それは一室六人か八人かの定員になっていた。）の四壁に貼りつけていた。——私は少なからざる感化を松陰先生から得た。東京に遊学するようになってからも、先生の祭日には何回か世田ヶ谷の神社に詣でた。そこに陳列してあった、お母さんから先生あての、仮名書きの手紙を見て、涙を落したことを思い出⁽¹³⁾す」。

明治維新の精神的原動力ともいべき吉田松陰の愛国主義的感情に心酔し、「私の胸の底に沈潜していた経世家的とでもいったような欲望は、松陰先生によって絶えず刺戟されていた」とする青年にとって、たとえ幸徳や木下尚江の運動を知ったとしても俄かに共感しえなかったことはむしろ自然であろう。しかしそれにしても筆者には、今ひとつ河上の思想について理解できないことがある。

といっても筆者の河上の思想や学問への認識は浅く、彼の手稿類の隅にまで眼を通したわけではない。従ってここで提示するのは、いわば仮説にすぎないが、河上は大逆事件についてどのように考えていたのであろうか。

大逆事件といわれて、幸徳伝次郎以下24名の社会主義者が逮捕、起訴されたのは、明治43（1910）年5月のことであり、河上は、すでに前年京都帝国大学助教授となり、この年10月、『経済学の根本概念』を出版している。こうした状況の下で、天下の耳目を聳動した大逆事件の報をきいたとき、河上はどのように反応したのであろうか。自叙伝には語られていない。思うに彼は、明治天皇暗殺の陰謀といわれ、当時それがまことしやかに信じられたとすれば、強い衝撃をうけ、何らかの感慨を催したはずである。自叙伝の執筆は、言論の自由を奪われた第2次大戦中の頃に書かれたものだけに、平民社の運動や大逆事件について彼からきくことができないのは残念であるが、おそらくは、生涯、ナショナリストとしての心情を失うことのなかった河上にとって、天皇の地位にかかわるこの事件にふれることは、苦痛を伴うところではなかったか。

以上、河上肇の思想形成における転換期について簡単にふれたが、こうした思想遍歴を背後にもちながら、彼はどのように経済学に接近し、その初期経済思想を形づくるに至ったのであろうか。『日本尊農論』を中心に考察することにしよう。

(3)

河上肇の経済思想上における『日本尊農論』の独自の意義は、明治38年、日本がその存亡を賭して戦った日露戦争によりやく勝利を占め、アジアの唯一の資本主義国として覇をとなえはじめた明治38年、日本農業の衰頽を憂え、まさにナショナリストとしての立場から、農工商の均衡的發展を主張したもので、それまでの彼の著作のほとんどが、西欧経済学の紹介、あるいは徳川時代の経済

注(13) 『自叙伝』(一)、84頁。なお「松陰神社々頭に泣く」、明治34年4月25日、『防長新聞』、全集第1巻、53～55頁を参照。

思想の考究であったのにたいし、政府の農業政策批判そして農業の国民経済上における重要性を明らかにしている点で、河上の初期経済学のなかで特筆に値するものであり、また今日、まさに日本農業が危機的状況にあるなかで、われわれに教訓として与えるものは大きいと考えられる。

明治の思想家、横井小楠の子息、時敬が序を寄せ、河上を祝福しているが、彼はその「自序」のなかでつぎのようにのべている。

「余輩生れて今や空前の盛時に遭遇し、目のあたり国威の発揚を見るは誠に其の光栄とする所なり。然れども余輩の窃に其の憂とする所のものは実に戦勝の余禍にあり。蓋し国威の発揚は商業の隆盛を来し、商業の隆盛は農業の頽廃を招き、而して農業の頽廃は遂に国家転覆の原因たるに至るは、古今実に其の軌を一にする所なればなり、この時に当ってこの書を公にす、必ずしも世務に小補なくんば非らざるべし⁽¹⁴⁾」。

虚遊軒文庫第二編と冠した『日本尊農論』は、第一章 経済上に於ける農業保全の利益、第二章 経済上以外より見たる農業保全の利益、第三章 国家の興亡と農工商との関係、の三章から成り、一貫して農業保護の観点から論じているが、注目すべきことは、「農は国の本なり」とする農業立国論の上に立つのではなく、農業保全を、国民経済的な再生産構造の問題として考察しようとしている点が特徴的である。彼がこのような日本農業についての経済学的認識に到達したのは、いうまでもなく、その背後に西欧経済学にたいする貪慾なまでの吸収があるわけで、その頃の昼夜を分たぬ彼のほげしい勉強ぶりには、暖衣飽食し「小人閑居して不善を為す」態の現代の大学教授連を忸怩たらしめるものがあるろう。彼はつぎのように述懐する。

私は明治三十五年七月（満二十二歳九か月の時）東京帝国大学を卒業し、間もなく妻を迎え、やがて長男が生まれた頃には、農科大学、学習院、専修学校などの講師を勤め、別に不足なしに暮して居たが、後に伯父の長男と今一人の伯父の長女とを預るようになってからは、家庭の空気がとかく私の勉強に適しなくなったので、私は暫く家庭を解散し、一心に研究に没頭したいと思ひ立ち、妻子を郷里の父母の手許に預け、私は食事付きの貸間を求め、一人でそこに住み込んだ。

勉強に熱中する余り、家族を解体するとはいかにも河上らしいが、しかしその求道者的な生活態度、その禁欲主義的な姿勢に、私は深い感動を覚える。しかし家庭を解体してみた結果はどうかというに、索漠たる心境に陥った。

「私はこれで専心研究に没頭し得る態勢を整えたつもりで、向う二、三年間は海外留学でもした心組で居ろうと決していたのだが、さて全力を——自分のいのちを——学問というものに懸けて見ると、思い掛けもないことには、学問は果してそれに値するやという大きな疑問が湧いて来た。そのため私は、折角一日二十四時間を自分一人で完全に独占し得られるような境遇を作り出しながら、それを十分に利用することが出来なくなった⁽¹⁵⁾」。

注(14) 『河上肇全集』第2巻、214頁。

(15) 河上『自叙伝』(五)、124頁。

若い頃、向上心と学問的名誉心に燃えたことのある者ならば、河上のこの焦燥にも似た感情がよく理解できるであろう。

「家庭を解散する以前には、昼間は同居している従弟や従妹がどうかすると友達を招いて来て、大きな声で騒ぐので、私は机に向っていても、とかく精神の集中が妨げられた。で私は夜間を主な勉強時間に充て、大概毎夜五更ごこうに至る頃まで書を読んだ。当時私は長屋風の貸家に住んでいたが、壁一重を隔てた隣は、主人が砲兵工廠に通勤しているうちであった。出勤時間が早いので、その妻君は暗いうちに起きて味噌をすり始めていた。……私はその隣の家のすりこぎの音が壁を通して聞えて来ると、それを合図のようにして始めて寢床にはいることを例としていた。

私はそんなにして勉強していたのに、さて一人になって見ると（客観的に云えば、これは私が家庭から離れたために一種のホーム・シックにかかったのであろうが）、心は喪家の狗の如く落着きを失って、経済学の研究に熱中するなどと云うことはとても出来ず、とかく宗教書を手にして考え込んでいる時間ばかり多くなった⁽¹⁶⁾」。

以上の若き日の生活体験からわれわれに伝わってくる猛烈な勉強は、当時の驚異的ともいふべき著作活動にあらわれている。

まず「経済学上之根本観念」と題する明治38年1月の著作は、「大学院学生 河上肇稿」と署名されているように、自費出版の書物として刊行され、その内容は、すでに明治36年8月20日、『国家学会雑誌』17巻198号に発表された「経済学上ノ根本問題ニ関シ現代諸大家ノ学説ヲ評シテ自家ノ所見ヲ述ブ」に展開されたものを、更に推敲して発表したものである。

ここに河上が言うところの経済学にかんする「現代諸大家」とは、まず、東京帝国大学法科大学教授として知られ、『社会経済学』の著者で、日本社会政策学会の中心的人物、金井延や『最近経済学』の著者田島錦治、政治学の小野塚喜平次、松崎蔵之助、戸田海市などの先学を指すものであり、『経済学上之根本観念』はこの著作をうけつぎ、何よりも、ドイツ新歴史学派の経済学の影響を色濃く残している点も、時代の風潮を感ずることができよう。最後の「第六 国民経済」のなかで、河上はつぎのように言う。

全体で20項目から成るこの論文の終末に近く、ほぼ結論とみなされる部分のなかで、

20. しかれば次いで問ふ。国家と国民経済との関係如何、吾人は国民経済には指導者を欠如せりと云へり、思ふに国家は果して之に対して何等の指導主宰を為すものに非らざるや否や。

答へて曰く、国民経済成立の初期に在りては、国民の組成分子は、各自の意思によりて各々一定の範囲に於て国民の経済を指導したるなり。しかるに、社会の進歩に伴ひ、国民は其の経済上の計画をば各分の自由意志に依りて左右せしむることの不利と危^{あや}険とを悟るに至り、遂に国家は其の意思を以て或る程度まで国民各分子の自由意志を制^さし、国家自ら国民経済上の計画を左右し指導するに至る……。是に依りて之を見れば、所謂国民経済なるものは、国民を組

注(16) 上掲書、124頁。

成せる各経済団体、国家及び其の他の公共団体の意思によりて指導され左右されつつある経済たるなり。

固より学者に依りては、経済上に於ける国家の干渉及び施設を全然排斥せんとするものありて、かの極端なる個人主義者の如きは、国民経済の指導をば、只だ其の組成分子たる各個人に一任するを理想とせるものなり。或はかの極端なる社会主義者の如きは、全然個人の指導を排斥し、凡て国民経済上の計画は国家之を決定せざるべからずと主張するものなり。

然れども、此の如きは単に理想たるに止まるものにして、現実の国民は敢て此の如き方法によりて経済を為しつゝあるに非ざるなり。

みられるように、ここには明らかにドイツ歴史学派の顕著な影響を感ずることができよう。そして結論につきのように言う。

22. 又た問ふ。国民経済には完全不完全の別あるか。答へて曰く、固より然り、国民によりては、国民経済を有するも極めて幼稚なるものあり、又た比較的に発達せるものあり。恰も之を政治上より論ずれば、最も能く統一されたる国民と殆ど何等の統一なき国民あると同一なり。然り、国民経済は発達物なり、而して之が完全なる発達を計るが為めに国民経済政策ありと知らずや。⁽¹⁷⁾

経済発展段階説を想わせるような叙述、国民国家の経済政策樹立の必要性を力説している点など、彼が社会科学の途上、最初に出版した学術論文のなかに、ドイツ歴史学派の強い影響を見出すことはきわめて興味深いものがある。

この短い、分量としては小冊子にすぎない処女作は、その後、発展せしめられて明治38年、『経済学原論』(上巻)となって現われた。今日では、消費という経済行為は、明らかに経済学の研究領域とされ、「消費経済論」という概念が普通に用いられるのにたいし、古典学派および歴史学派の最盛期においては、排除されていたことを、この書の序文は物語っている。

「回顧スレバ、余ガ始メテ斯学ノ根本觀念ニ関シ愚見ヲ公ニセシハ、一昨年ノ八月ニ在リ。当時余ハ『経済学上ノ根本問題ニ関シ現代諸大家ノ学説ヲ評シテ自家ノ所見ヲ述ブ』ト題セル一文ヲ国家学会雑誌ニ公ニシ、以テ識者ノ教ヲ受ケント企テタリキ。⁽¹⁸⁾

この論文にたいして、東京高商教授、福田徳三博士の批判を浴び、前述の『経済学上之根本問題』を草し、「余ハ経済ト経済行為トヲ分チタリシモ、猶ホ所謂消費ニ至リテハ、僅ニ之ヲ経済行為ヨリ除外セシニ止リ、経済ニ至ツテハ従来ノ学者ノ説ケルガ如ク消費ヲ包含スルモノト説明シタリキ」⁽¹⁹⁾。

これにたいしては吉野作造が、『国家学会雑誌』において、「経済ニ消費ヲ包含スルコトノ非ナルヲ指摘」したので、そこで反省を加え、「従来ノ説ヲ改メ消費ヲ以テ経済ノ範囲外」ということを、

注 (17) 全集第1巻、30~31頁。

(18) 全集第2巻、4頁。

(19) 前掲、5頁。

この『経済学原論』上巻において明らかにしたのであった。

思うに歴史学派の圧倒的な影響下に、古典学派の理論が混淆し、わが国における経済学研究の黎明期であった。それにしても、この『経済学原論』は、わが国の、もっとも早い時期に現われた体系的なテキストではなからうか。Schmoller, Wagner, Brentano を中心として、Roscher, Rau, Schäffle, Dietzel, Rodbertus, List, Hildebrand, Bücher, Knies など、新旧歴史学派の巨匠たちの文献を縦横に駆使し、その猛烈な勉強を偲ばせるが、マルクスとエンゲルスの名は一度も出て来ない。科学的社会主義はまだ彼の研究視角に入ってきていない。

だが驚くべきことに、河上は、『経済学原論』上巻が発行される1年前、明治37年、『日本尊農論』を公刊し、西洋経済学の導入そして紹介の域をこえて、深く日本経済の内奥にひそむ矛盾を暴露しようとしたのであった。この両者は、著者の経済学研究史上、どのような脈絡の上でこの時期に出現したのであろうか。河上が「自序」において語っているように、この『日本尊農論』は、日露戦争勃発の帝国主義的昂奮のたかまりを背景に、戦後に日本を襲うであろう経済的諸矛盾を強烈に意識して書かれたものであった。そして農業保護を力説する彼の姿勢は、農業切り捨て政策を推し進めるかにみえる20世紀末のわが国の政策に、何事かを示唆するのではなからうか。

「然れども国家の興亡を健全なる国民経済の発達とは常に離るべからざる関係を有するものにして、而して健全なる国民経済の発達は、農工商の三者をして能く其の鼎立の勢を保たしむるに在りとは、余輩の確信して疑はざる所なり」⁽²⁰⁾

目次を見れば明らかなように、第一章 経済上に於ける農業保全の利益、第二章 経済上以外より見たる農業保全の利益、および第三章 国家の興亡と農工商との関係、という章別編成において、自由放任主義の批判、すなわち、イギリスを中心とする自由貿易主義が、いわゆる商工立国論を唱え、産業革命以来、農業を犠牲に供して、商工業の発展を図り、国運の前途を危くした所以を、ローマ帝国衰亡の歴史を比較しつつ論じている。何よりも彼は、自己の農業保護論と、従来の一般的な見解との差異を以下のように主張する。

「農業保全の必要を説くもの農学者農政学者に乏しからず、然れども多くは軍事上社会上衛生上の理由に重きを置き富国の手段として経済上直接の利益ある所以を説くに於て遺憾あるに似たり」⁽²¹⁾

要するに「商工偏重主義の不利なる所以を指摘」するもので、「商工業を犠牲として農業を保全せんとするにあらず」というのである。

おそらく河上の胸中には、日露戦争という未曾有の大国難に際会して、もし長期戦となり、食糧供給の途が杜絶され、国民が飢餓状態に陥ることがあれば、どうなるのか、彼はその危機感を身をもって感じ、英国の政治に徴して農業保護の必要性を力説して、「しかるに本邦に於ける論者が只だ英国商工業の外観にのみ眩惑し、其の由来と其の現状を明らかにせず、妄りに廿世紀に於ける英

注 (20) 前掲、第2巻、214頁。

(21) 前掲、219頁。

国を以て任ぜんとするは愚の極なりと謂ふべし」と警告する⁽²²⁾。興味深いことに、この文中にクロポトキンの『田園、工場および仕事場』(P. Kropotkin)を盛んに引用し、その農工業の共存、両者の同時的發展を強調していることで、クロポトキンの英国農業衰退の原因追求とその回復の論理に共鳴しているが、クロポトキンの無政府主義思想についてはふれていない。

それにもかかわらず、河上の農業保護論は、日本に伝統的な農本主義に對立的であることで、「農業を以て商工業の敵とするの非」をつぎのように主張する。

「然りと雖も農業は敢て商工業の敵たらざるなり、思ふに極端なる商工偏重主義は往々にして農業の敵たると等しく、極端なる農本主義は亦た商工業の敵たらん⁽²³⁾」。

若冠26歳の青年学徒河上は、今や西欧経済学の新知識をもって、帝国主義戦争の渦中にある祖国の経済が内包する矛盾に肉薄する。

彼の立場は、一貫して経済の循環と再生産構造の観点から問題を解き明かそうとするものであって、つぎの一節は、内需拡大の外圧に悩む現代の日本にとって無縁な内容ではない。

「嗚呼吾人は何が故に一国の農業を犠牲となし、以て商工業を盛にせざるべからざるか。何が故に商工業を盛にし、以て他邦人の需要を充さざるべからざるか。……国内における一円の需要は、海外に於ける二円の需要より猶ほ重きを為すものたらずんば非らず。しかるに国内の需要は措いて顧みず、専ら海外に眩惑するは何が故ぞ。所謂資本家なるものを見るに、只管ら賃金の支払を吝にし、其の同胞を酷使し、以て工業品の生産費を低廉にし、頻りに海外に於ける販路の拡張を努むるに似たり⁽²⁴⁾」(傍点引用者)。

ここには、すでに内需拡大論が、きわめて現実性を帯びて登場する。さらにつぎのようにもなっている。

「地方を衰頽せしめ農民を犠牲となし、かくて工業は未曾有の発達をなし、而して都会に於ける資本家の富は駭々乎として膨大せり。此の如くにして集積せられたる資本は、独米其他の諸洲に放下せられ、他国に於ける産業の勃興を助け、今は却って其の本国に向って有力なる競争品を生産するの用に供せらる。奇なる哉、彼等資本家は自国の農業を犠牲として資本を集積し、而して其の資本を以て他国の農工業を助け、因って以て益々自国産業の競争者をして多からしめ強からしめつゝあるなり⁽²⁵⁾」。

しかし河上の理論のなかで、もっとも注目すべきものは国際分業論批判であろう。おそらくこれは、F・リストのアダム・スミス批判に学んだものと思われる。歴史学派的発想であるとしても、食糧管理法を廃止し、農地に宅地なみの課税をかけ、農業切り捨て政策の強行を主張する人々が、「先進国日本」の工業立国、従って、国内での食糧自給率の低下に関心を払わず、食料品は輸入に

注(22) 上掲第2巻、224頁。

(23) 前掲、232頁。

(24) 前掲、234頁。

(25) 前掲、235頁。

よって賄い、農地の宅地化を強力に推進すべしとする今日の浅薄な国際分業論にたいする批判に通ずる面をもっている。すなわちつぎのように言う。

「蓋し個人の上には国家あり、分業の弊起るに当りては之が保護救済の方策を講ずるに吝ならず、独り国家に至りては国家の上に国家あるに非ず、自ら警戒し自ら保護するに非らざれば何者か能く之を救済せん。国際の競争日々に激甚を加ふるの際、徒に経済社会の外観に迷盲して、極端なる国際分業を実行せんとするは、これ国家百年の大計を誤るものなり」⁽²⁶⁾。

無制限の貿易拡大、それによって一国が「経済大国」となって世界の市場を席捲すること今日の日本はその典型であろう。ところで、つぎの河上の主張は、現在の日本の貿易政策にたいする批判として有効であろう。

「況んや世界の大国は年一年未開野蛮の諸邦を征服して益々其の大を加へ而して其の版図を打って一丸となし、之を以て自己の産物を売り付くべきの販路となし、其周囲には税関と称する一大鉄壁を築いて全く外国の貨物を排斥するに於てをや」⁽²⁷⁾。

河上の疑問は、「外邦に於ける異国の民族に向って其の需要を満足せしめんがために貨物の生産を奨励するの必要あるや否や」という点であり、抗議せずにはいられないのは、「只だ海外の輸出にのみ熱中して他を顧るに違あらざる」状態であったろう。そして、耐えられないのは、「彼等は其の同胞中最多数を占めつゝある労働者を敵視して、却って異邦に於ける異人種を顧客として尊重する」傾向であった。

「吾人は内充ちて然る後ち外に張らんことを主張するものなり。内虚にして妄りに外に張るの非たるを信ずるものなり……。然るに愚なる哉世人徒に外形の独立を説いて内実の独立を計らざるなり。只だ妄りに政治上の独立をのみ見て、経済上に於ける独立を顧みざるなり」。

ここまで読んでみると、河上は社会主義の堂門に額づこうとするかのような感に打たれる。だが、それにもかかわらず、「吾人は必ずしも社会主義に賛同し、国内に於ける商賈の事業を挙げて国家の政務となさんと欲するものに⁽²⁸⁾あらず」とのべて、ひたすら、熱烈な国民国家論者たろうとするものようである。

それでは彼は、無条件な農業保護論者であったかというに、つぎの一節はやはり、わが国が、20世紀末の今日直面しつつある状況において、考えさせられる多くのものをひそませている。すなわち彼は言う。

「一国の農産物価格を人為的に騰貴せしめ、之によりて農民の衰頹を防がんとするが如きは、最も不健全なる思想なり。此の如き保護政策の結果は、只だ徒に競争の範囲を縮少し、農業の改良を阻害し引いて国民の生活を困難ならしめ、商工業を衰頹せしめ、遂に一国経済上の発達を⁽²⁹⁾抑遏し国家の進運を妨ぐるものなり」。

注 (26) 前掲、238頁。

(27) 前掲、254頁。

(28) 前掲、258頁。

(29) 前掲、263頁。

農業保護を唱道しつつ、ここにみられるものは、自由競争の奨励である。

「人為を以て農産物価格を騰貴せしめ、或は其の下落を妨害せんか、これ一国々民を犠牲として怠惰なる農民を保護するものなり、夫れ生存競争は社会進化の大法なり、競争ある処社会活動し、競争なき処百事退却す。故に吾人は人為を以て穀価を騰貴せしめ、彼の怠惰なる農民、無智なる農民の保全を計るに反対するものなり」⁽³⁰⁾。

これをみると、河上は無制限な農業保護論者ではなく、「人為を以て農業の保護を計らんか、倒るべき者も倒るゝ能はず、改良すべきの農法も改良せらず」という状態に陥り、「此の如き保護策は子を愛する余り却って其の身体を薄弱ならしめ気力を喪失せしむるに異ならず」という。その意味では、つぎの河上の意見は、現代日本の農業保護政策にたいする批判にも通ずる。

「廉価なる農産物は彼岸に溢れつゝあるに係らず、関税を重課して之を国内に輸入せしめず、以て国民の食料を高価ならしめ、其の生計を困難ならしむるは、断じて社会の福祉を増進する所以の道にあらず、況んや農産物価格の騰貴は、労働者の賃金を高からしめ、工業の原料を高価ならしめ、従って工業乃至商業の隆盛を妨ぐるに於て大なるものあるに於ておや」⁽³¹⁾。

河上の農業保護論は、結局のところ、「只だ唯だ農民自ら其の業務の改良進歩に鋭意し、以て其の貴重なる天職を抛棄し、その尊重すべき祖先の田野を去ること勿れ」と云うにとどまるとすれば、その論説の意図の壮大なるに比し、結論は平凡といわざるをえないが、問題は当時の日本農業を根底的に規定した寄生地主制と零細経営の現実には全くふれていないことである。それは同時に、「第二章 経済上以外より見たる農業保全の利益」が、軍事的観点からする食糧自給率の確保、民族膨脹のための余剰人口の農村における維持という、富国強兵の視角から論じられている点とも関係がある。

だがそれにもかかわらず、河上は、第1次大戦の10年も前に、イギリス農業の衰退を洞察し、戦時における食糧自給率の低下が、どのような結果を齎すかを論じ、その意味で、第1次大戦中におけるイギリスの深刻な食糧問題を予言したものであり、今日のわれわれに多くのことを示唆している。この論文について河上の論理の矛盾を衝くことは容易であろう。しかし明治38年、日露戦争勝利の歓声のさなかに、日本資本主義が深淵に臨みつつあることを察知し、警鐘を乱打しつつある青年の叫びとして考え、さらに、時代を今日におきかえてみると、読者は必ずや新たな感慨にうたれるであろう。

〔あとがき〕 経済学部専任者諸君に訴える

7月10日頃、三田学会雑誌編集委員長、浜田文雅君から、5月31日締切の原稿が集まらず、苦勞しておられる由をうかがい、明7月20日、2か月の英国での研究に旅立つにあたり、急遽、この原稿を委員会に託す。

この4月、経済学会会長就任を委嘱されたとき、小生は、三田専任者諸君を前に、年一編の論文寄稿を最低の義務と要請し、諸君の快諾をえた。然るにわずか2か月にして、『三田学会雑誌』は、

注 (30) 前掲、263頁。

(31) 前掲、263頁。

その創刊以来、最大の危機に立ち到った。

35年を超える筆者の研究生活においても、わが学部の学問的状况がかくも荒廃し、三田専任者の研究意欲が低下したことはなかったのではないか。まさに小生が会長のときに、このような危機的状况に直面したことに、重大な責任を感じる。

『三田学会雑誌』は、大学研究機関誌として輝かしい伝統を誇り、堀江帰一先生をはじめ、高橋誠一郎、小泉信三両先生の時代をへて、幾多の曲折を経ながらも、今日に¹至っている。『三田学会雑誌』の伝統を守り、慶應義塾の学問の発展、ひいては日本の独立と學術文化の向上のために、経済学部の諸君の奮起を期待する。

1987年7月19日、渡英直前に記す。

(経済学部教授)